

「コロナ」から学校教育をリデザインする

学術知共創の可能性と課題

研究代表者	吉田 成章（教育学系コース）	
研究分担者	草原 和博（社会系コース）	木下 博義（自然系コース）
	松宮奈賀子（初等教育教員養成コース）	川合 紀宗（特別支援教育教員養成コース）
	三好 美織（自然系コース）	小山 正孝（数理系コース）
	影山 和也（数理系コース）	棚橋 健治（社会系コース）
	川口 広美（社会系コース）	金 鍾成（社会系コース）
	山元 隆春（国語文化系コース）	間瀬 茂夫（国語文化系コース）
	川口 隆行（国語文化系コース）	永田 良太（日本語教育系コース）
	岩田昌太郎（健康スポーツ系コース）	井戸川 豊（造形芸術系コース）
	丸山 恭司（教育学系コース）	滝沢 潤（教育学系コース）
	三時眞貴子（教育学系コース）	森田 愛子（心理学系コース）
	桑山 尚司（グローバル教育コース）	
研究協力者	安藤 和久（教育学プログラム）	中村 好甫（教育学プログラム）
	太田 淳平（教育学プログラム）	大矢 龍弥（教育学プログラム）
	川本吉太郎（教育学プログラム）	佐々木龍平（教育学プログラム）
	藤原 由佳（教育学プログラム）	金 原 遼（教育学プログラム）
	武島 千明（教師教育デザイン学プログラム）	三戸部由幸（教育学プログラム）
	澤田 百花（教育学プログラム）	俵 龍太郎（教育学プログラム）
	藤井 冨佳（教育学プログラム）	

I 研究の背景と目的

1. 本研究の目的

本研究の目的は、「ポスト・コロナの学校教育」を提起するために、「コロナ」によって学校教育をいかにリデザインしうるのかを明らかにすることにある。そのために、令和2年度共同研究プロジェクト『ポスト・コロナの学校教育』の提起する学術知共創の可能性と課題」（以下、「2020年度課題」）の取組の成果（吉田ほか2021参照）を継続・発展させ、COVID-19による世界的パンデミックが学校教育に与えた影響を調査する大規模アンケートを実施し、その調査研究に基づく知見を国内外の教育関係者を対象としたセミナーとして還元するとともに、セミナーを通じて演繹される人文・社会科学分野の学術知共創の可能性と課題を研究成果として結実する。

COVID-19（以下、コロナ）が学校教育へ及ぼした影響やインパクトは多様なレベルに及んでいる。コロナと教育に関わる著作の刊行、コロナと教育に関わるアンケートの実施、そして様々なセミナーや研修等の取組である。2020年度課題の成果として、本共同研究チームは『ポスト・コロナの学校教育—教育者の応答と未来デザイナー』（広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原和博・吉田成章編著、溪水社、2020年7月、以下『コロナ』本）を

刊行し、2020年7月～2021年3月まで毎月全9回のセミナーを開催し、その成果を『「コロナ」から学校教育をリデザインする—公教育としての学校を捉える視点—』（広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原和博・吉田成章編著、溪水社、2021年6月、以下『リデザイン』本と略記）として刊行した。この中で、コロナと教育に関わる国内外の文献を調査し、EVRI事務局・B101に配架して広く学生・市民に公開するとともに、EVRIのHPから閲覧できるようにもしている。また、コロナと教育に関わるアンケート実施の状況をレビューし、EVRI独自のアンケートを実施・分析することで、コロナと教育に関わる顕在的・潜在的ニーズを把握するとともに、オンデマンドのセミナーの開催につなげてきた。

国内外の「コロナと教育」を巡る研究・教育の動向に比して、本研究プロジェクトが有している際立つ独自性は、その組織的一貫性と体系性、そして先進性にある。すなわち、EVRIの全メンバーに加えて教育学研究のトップランナーの参画によって組織的に一貫性のある研究プロジェクトとして推進していること、さらに全学校種・教科・領域をカバーする体系的な研究活動であること、そして教育学理論・研究を背景としながらも教育実践との深いコミットに支えられ、かつ政策提言にまで踏み込んだ先進的な知見を提起するシンクタンクとして、活動を維持・継続していることにある。

2. 本研究の研究課題

そこで本研究では、以下の四つの課題に取り組むこととした。

①「コロナと教育」に関する国内外の文献調査

「コロナ×教育」参考図書リスト（EVRIのHP：<https://evri.hiroshima-u.ac.jp/13096>）を更新する。刊行される著作をリストとしてフォローし、主要著作を購入してB101に配架することで、広島大学教育学部の情報集積力および発信力を強化する。

②「コロナと教育」に関するアンケート調査

これまでに2回実施してきたEVRI「コロナと教育」アンケートを大規模調査として実施する。これまではEVRI関係者の周辺およびセミナー関係者に限定的に実施してきたアンケートを、全国規模かつ大規模な調査として実施し、同様の関心をもつ教育関係者に還元するとともに、広島大学教育学部のもつシンクタンクとしての機能をEVRIを通じて強化する。

③EVRIセミナー「ポスト・コロナの学校教育」シリーズ開催

全4回のセミナーシリーズを実施する。開催時期は2021年6月・9月・12月・2022年3月で、2020年度課題のメンバーにさらに2名を加えて研究組織を強化し、分野横断による研究発信力を強化し、教育学分野以外の研究ネットワーク構築を意識的に行うことで、人文・社会科学における学術知共創の可能性を拡大させる役割を広島大学教育学部が担う。

④『教育の未来デザイン』刊行

上記の取組の成果を『教育の未来デザイン（仮）』と題する著作として2022年6月に刊行し、「コロナ」から学校教育をリデザインする学術知共創の可能性と課題の具体を提起する。

以上の四つの課題に取り組むことで、「ポスト・コロナの学校教育」を提起するために、「コロナ」によって学校教育をいかにリデザインしうるのかに言及する。なお、『教育の未来デザイン（仮）』の編集・刊行作業、および「コロナ×教育」アンケートの分析作業は本原稿執筆時点で進行中であるため、本稿での研究成果の記載は上記の①と②の研究課題を中心とする。

（吉田成章*）

Ⅱ 「コロナ×教育」の著作リストの更新とアンケートの実施

1. 「コロナ×教育」の著作リストの更新

2020 年春以降、コロナが教育にもたらした影響や、ポスト・コロナの教育を描いた著作が国内外で数多く出版されている。そこで、本研究では前年度に引き続き知の集約として、国内の書籍や雑誌、および英語を中心とした外国語書籍の調査と収集を実施した。調査は経年で適宜行い、①インターネットを利用して検索、および②広島大学に所蔵の教育関連雑誌の閲覧によって行った。以上の調査方法を通して、書籍については書名だけでなく目次や内容説明からも関連性を判断することで網羅的にリストアップし、雑誌については各巻号を確認して特集あるいは連載としてまとまっているものを抽出し、それぞれの雑誌が編集上どのような問題設定を行っているかが明らかとなるよう努めた。結果として、これまでに国内 100 件、国外 48 件の計 148 件の書籍と、雑誌からは 136 件の特集および連載テーマをリストアップした。

以上の調査にあわせて EVRI のホームページ上の「コロナ×教育」参考図書リストを 2021 年 8 月、11 月、2022 年 2 月の計 3 回にわたって更新した。更新と同時に掲載方法や形式についても検討を重ね、学術知共創に資するリストとして利活用しやすいものとなるよう変更を行ってきた。現在はリスト化した著作の一覧を PDF ファイルで掲載しており、誰でもダウンロードして閲覧でき、関連文献の検索が可能となっている。とりわけ書籍に関しては、電子データであることを生かして、各書籍の詳細が確認できるようほとんどの書誌情報に出版社のページにジャンプするハイパーリンクを埋め込んでおり、本リストの利便性を高めている。そして、リスト化した著作のうち、主要著作は広島大学教育学部棟 B101 (EVRI) に収蔵・配架されている。とりわけ、このことは、学術知共創の場としてのプラットフォームの構築に寄与するものとなるといえる。

(大矢龍弥*・安藤和久・中村好甫・武島千明・三戸部由幸・
澤田百花・俵龍太郎・藤井冨佳)

2. 「コロナ×教育」アンケートの実施概要

2021 年度、EVRI では広島県の教職員に向けて 2 回のアンケートを実施した。

まずは 2021 年 4 月に実施したフォローアップアンケートである。これは 2020 年 4 月の緊急アンケートから 1 年が経過した段階で、学校現場に困難はあるのか、どのような側面で困難が多いのかについて調べることを目的とした。なお、2020 年 4 月の調査時に個人を特定する作業を行わなかったため、2020 年 4 月と 2021 年 4 月の調査対象者は一致していないことに留意が必要であるものの、一定程度条件を揃えた継続的な調査であることが特徴として挙げられよう。調査期間は 2021 年 4 月 2 日から 19 日で、Google Forms を用いて調査を実施した。対象者は、広島大学の研究者からの呼びかけ、EVRI の HP からの誘導によりサンプリングを行った。回答者は教職員 75 名（教職員以外の 13 名の回答、および不備のあった回答 2 件は分析に含めていない）で、回答者の所属は、幼稚園・保育所・子ども園 9 名、小学校 13 名、中学校 11 名、中等学校 7 名、高等学校 21 名、専門学校・大学 13 名、その他（教育センター）1 名であった（cf. 森田・太田・藤原 2021, 21-27 頁）。

次に、2021 年 11 月の段階で新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）によりどのような困難に直面しているか、コロナ前の学校に戻りたいか、新たな学校に変化していくことが

望ましいか等に関する教職員の意識把握を目的として、広島県の教職員を対象としたアンケート調査（以下、秋アンケート）を行った。本調査は、これまで実施したアンケート調査とは異なり、広島県内の全国公私立の小学校・中学校・高等学校・義務教育学校・特別支援学校（計 882 校）に対象を拡大して実施したものである。回答期間は 2021 年 11 月 8 日から 11 月末まで、回答方法は Google Forms によるウェブ回答とアンケート用紙の郵送法を併用して調査を実施した。回答数は 1,126 件（内、ウェブ回答は 470 件、郵送回答は 656 件：郵送枚数を母数とした 2,760 に対する回収率は 40.8%）であった。

秋アンケートの特徴は大きく 2 つある。1 点目はアンケート実施の規模である。これまでのアンケートでは回答者が限定されていたが、秋アンケートでは広島県全体の教職員に回答を依頼した。これによりコロナ下における広島県の教職員全体の状況を考察するのに足るデータを収集できたものと考えられる。2 点目はアンケート対象者の多様化である。調査規模を拡大したことにより、回答者の属性も多様となった。具体的には、養護教諭や学校事務員などを新たに調査の対象とすることができた。このことで教職員の属性・立場等の違いによる、コロナ下で抱える困難性の差異を量的手法によって検討することが可能となった。

なお、秋アンケートの分析は 2022 年 2 月現在も継続中であり、分析結果およびその考察は、『教育の未来デザイン』にて報告をする予定である。

（太田淳平*・川本吉太郎*・佐々木龍平*・藤原由佳*）

Ⅲ 全 4 回のオンラインセミナーの開催

1. 第 1 回「ポスト・コロナの学校教育をリデザインする視点」

2021 年 6 月 19 日（土）、EVRI 第 81 回定例オンラインセミナーとして実施した本セミナーでは、『リデザイン』本の第 1 章第 2 節「コロナ禍の学校教育への影響の調査」の執筆者による話題提供と、他大学で「コロナと教育」にかかわる取組に携わっている教育学研究者によって『リデザイン』本のレビューならびに自らの取組の報告が行われた。

セミナー冒頭、草原和博より本セミナーの企画趣旨が説明された。草原は、本セミナーの位置づけと「第 3 フェーズ」の課題を提示すると同時に、EVRI 連続セミナーシリーズがもつ、「それぞれの時期に一定の間隔でセミナーを開催する」という、コロナ下の教育現状を定点観測することの意義と方法論を述べた。

次に、森田愛子、太田淳平、藤原由佳からアンケート調査の報告が行われた。森田らは、コロナ下の学校教育でこれまでも論じられてきた課題に加えて「第 3 フェーズ」特有の課題が見えてきたことを指摘し、学びの多様性の保障や、従来の学校が有する価値観の見直しの必要性など、これからの学校教育のための論点を提示した。

森田らの報告を受け、田中智輝氏（山口大学）は、『学校が「とまった」ローウィズ・コロナの学びを支える人々の挑戦ー』（中原 2021 参照）のなかで実施した、高校生や小・中・高校生の保護者に対するオンライン質問紙調査や、教員や中高生、保護者、NPO に対するインタビュー調査による知見をもとに、『リデザイン』本におけるアンケート調査を読み解いた。また、「ポスト・コロナの学校教育」構想は、一斉休校やコロナ禍で見えてきた課題をふまえたものになっているのか、という問いをもとに、「リデザイン」に向けて考えておきたいこととして、①かねてより存在した課題への着手とコロナ禍における新たな取組の検証、②公共空間のリデザインを含む公教育のリデザインの試み、③説得のためではなく議

論を開くためのエビデンスの提示、の3つの論点を提示した。

続いて、西岡加名恵氏（京都大学）は、『リデザイン』本のアンケート調査から「学校の良い部分は残したいが、より良い学校を目指したい」という教師の願いを読みとったうえで、京都大学大学院教育学研究科が創設した E.FORUM（教育研究開発フォーラム）での取組を説明した（京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM・教育研究開発フォーラム HP、参照）。また、①どのようなビジョンを目指すのか、②学校教育を主軸としつつどこまでを視野に入れるのか、③どのようなニーズに応えるのか、の3つの論点を提示した。

ウェビナーの Q&A 機能を活用して行われた質疑応答では、登壇者と参加者の間で活発に議論が交わされ、いかに人やモノと関わるのかといった関わる力としての学力観や、批判的に情報を取捨選択する力を育成すると同時に子どもの反応から情報の提示の仕方を構想していくデザイナーとしての教師の力が提示された。

最後に総括として、司会の木下博義が、リデザインを問いつつもリデザインが進行しているという実感の中で関わり方のバリエーションが増えてきている点を指摘した。また、同じく司会の丸山恭司は、教師や親や研究者といったそれぞれの立場で課題にいかに応答していくのかを議論できる場としての EVRI セミナーの役割を示し、ケアするもののケアの視点を含めた多様なアクターを巻き込んだ議論の重要性を共有した。

（草原和博*・安藤和久*・武島千明*・木下博義・丸山恭司・森田愛子）

2. 第2回「コロナ下における学校カリキュラムを問い直す―学校行事・特別活動・総合学習の事例から―」

2021年9月18日（土）、EVRI 第91回定例オンラインセミナーとして実施した本セミナーでは、コロナ下にあって延期・中止を余儀なくされている学校行事、特別活動、総合学習などの教育活動に着目し、各学校の取り組みに関して報告が行われた。

間瀬茂夫は、本セミナーの趣旨説明として、自身の小学校校長としての経験に基づいて、コロナ下における学校行事等の教育活動は学校ごとに検討がなされている一方で教育行政からのトップダウン的な決定に依るものが多い現状を紹介した。そのうえで、学校行事の延期・中止あるいは実施のもつ意味はどのようなものであるか、また学校行事の実施に関わって起こる問題は教科学習も含む学校教育全体のあり方にも関わるのではないかと課題意識を確認した。

続いて、2つの実践報告がなされた。広島大学附属小学校教諭の梅比良麻子氏は、「なぜ合唱祭を中止しなかったか」と題し、伝統的な学校行事として実施されている合唱祭に関する2020年度の取り組みについて報告した。従来の方法による合唱祭の開催の断念を余儀なくされた梅比良氏は、児童の「みんなと一緒に」との発言を踏まえ、「合唱に取り組む姿勢を認め合う」ことを目標とした全校での合唱「鑑賞会」を提案・実施した。すなわち、合唱「鑑賞会」を身体的な共有の場として価値づけたのである。そのうえで、学校に集まって「一緒に」実施するといった身体・空間・時間のもつ「身体性」に注目する必要性を述べた。

次に、島根県立安来高等学校教諭の広戸茉莉氏は、「コロナが浮き彫りにした学校行事や部活動の本筋」と題し、吹奏楽部、音楽科の授業、総合的な学習の時間の3つの取り組みを報告した。吹奏楽部では、定期演奏会や吹奏楽コンクールの中止を乗り越え、部員（3年生）の要望や他の教員の後押しにより文化部合同演奏会の開催に至った。音楽科の授業では、一

人ずつレコーディングを行うことで校歌の新しい音源を作成するといった課題解決型の学習を設定した。総合的な学習の時間では、市の施設（演芸館）との連携により地域課題を生徒たちが自分ごととして捉え、課題解決に取り組む機会を創出した。以上を踏まえ、コロナだからと安易に諦めず工夫し取り組んだからこそ見える各活動の価値を主張した。

以上を踏まえ、愛媛大学の白松賢氏は、今回の2つの事例報告を子どもの声に基づいた教員の提案を、他の教職員の協力を得て実現に至るという一連の流れが上手くいったモデルケースとして位置づけた。その上で、特別活動は子どもと教員の基礎的な関係性に応じてプラスにもマイナスにもなることが述べられ、この背景には学校カリキュラムの中核に各教科が位置し、それらを取り囲むように感化の「道徳」、行動化の「特別活動」が位置するというカリキュラムの構造的特性が根本にあることを指摘した。

最後に、司会の間瀬茂夫・井戸川豊より、教員の働き方改革や負担感の観点、あるいはコロナ下において学校行事等を実施するうえで必要な配慮を検討すべきとの観点からまとめがなされた。

（小山正孝*・川本吉太郎*・武島千明*・井戸川豊・川口広美・間瀬茂夫・三好美織）

3. 第3回「子どもの「声」を聴こう」

2021年12月18日（土）に、EVRI第103回定例オンラインセミナーとして実施した本セミナーは、コロナ禍において子どもたちがどのように感じているのか、児童生徒たちへのインタビューをもとに、教育学研究者と心理学研究者から論点が提示され、セミナー参加者同士で議論が行われた。

冒頭、三時眞貴子より本セミナーの趣旨が説明された。これまでコロナ禍における学校教育について、教員の声や実践に注目した一方、子どもの声を聴くことは少なかった。そのことを踏まえ、本セミナーを子どもの「声」を聴くことでリデザインを考える場として位置づけ、「非日常」を「日常」として過ごす子どもたちが、どのように生き、何を感じるのか、こうした大人からの問いかけにどう答えるのかという問題設定を確認した。

続いて、3本のインタビュー動画が供覧された。動画は小中高校生各2名を対象に、約1時間ずつ行われたインタビューを編集したものであり、コロナ禍において学校や休日の生活がどのように変化したか、どう感じているか、コロナが無かったら、収まったら何をしたいか等、子どもたち個人の様々な「声」を聴く内容となった。

動画を受け、中部大学の子安潤氏は、教育学研究の立場から、子どもの生活や子どもの様子に関する研究調査を紹介し、コロナ禍で子どもの生活が高いストレスに晒されていることを指摘した。学校での孤立的な学びがもたらす課題、コミュニケーションの制限が子ども同士の関係性に与える弊害、長時間オンライン上で繋がるのが他との繋がりを切断した状態を作り出すこと、オンライン上の活動が記録として残存し続けることの危険性等、様々な問題を例示した。これらの点から参加者同士の議論に向けて、コロナ禍で生じた制約をどのように補うのか、あるいは補えないものとは何かという論点を提示した。

次に、天理大学の金山元春氏は、心理学研究の立場から、インタビューの「声」から見える子どもの姿を捉える上での留意点として、子どもの姿とは、子どもと関わる自分（大人）との相互作用、子どもへの関わりへの反映として表れるものであることを指摘した。一方で、動画の子どもたちには、発達心理学における一般的な傾向が表れているとして、心理学的観

点から、インタビューにおける小中高校生それぞれのコミュニケーションの特徴を解説した。これらを踏まえ、参加者には、学校から帰れば同調圧力から解放された以前と異なり、常に気を使わなければならない生活を今の子どもは強いられているのではないかという疑問を取り上げ、個人の時間と他者と繋がっている時間とのバランスという論点を提示した。

両名からの報告の後、セミナー参加者で議論が行われた。議論では、種々の制約がある中、子どもたちがたくましく生き、そのあり方に大人が励まされていると肯定的に子どもの「声」を捉える意見が寄せられた。また、制約を補うツールとしてインターネット利用をどう指導するのか、子どもたちが大人の目の届かない「避難所」を設けることの是非、「子どもが語りたいことでなく、大人が聴きたいこと」の答えとしての子どもの「声」や姿に、我々はどう向き合うべきなのか等、課題や論点に関連した議論も活発に行われた。

議論の後、子安氏と金山氏から再度コメントを頂いた。子安氏は、コロナ禍での生活の中にある「ひずみ」に直面する子どもの「声」からは、正と負の両面を捉えなければならず、困難を抱えた子どもをどのようにケアしていくべきなのかという、「個の問題」に 대응することの重要性を指摘した。金山氏は、今の子どもの姿とは、それを見ている人自身が捉えている姿であり、同じ対象を見たとしても、映る姿は見る人によって様々に異なるものであることを再度強調した。

最後に、川合紀宗は閉会の辞として、子どもたちの持つたくましさや柔軟さ、一方で指摘された個別具体的様々な課題という、現在の正と負の両面を振り返った。そして、我々は既存の概念が通用しない現状を理解し、課題解決に取り組むため、時代の変化に追いつき、先見の明を持たなければならないと、本セミナーを総括した。

(影山和也*・中村好甫*・大矢龍弥*・川合紀宗・金 鍾成・
三時眞貴子・永田良太・山元隆春)

4. 第4回 「『学校休業』からの2年間でどう総括するか ―地域・学校・社会を『教育』でつなごう―」

2022年3月5日(土)のEVRI第109回定例オンラインセミナー講演会として実施する本セミナーでは、「学校休業」からの2年間で振り返り、子どもたちのいない学校で何ができるのか、先生や友人と会えない日々をどう過ごすのか、社会と地域の「交流」が困難になる中で、何をどう支援することが未来につながっていくのかといったような、2年間で直面してきた様々な悩みを「対談」形式で取り上げ、共に明日の「教育」の未来を探る。

対談は次の3つを企画している。一つ目は、濱本信成氏(福山正剛法律事務所)と前田有紀氏(前田法律事務所)の二人の弁護士と教師教育・教科教育を専門にしている研究者(岩田昌太郎・桑山尚司)との対談、二つ目は松村智由氏(湯本豪一記念日本妖怪博物館館長、前・三次市教育長)と教育行政・社会科教育を専門にしている研究者(滝沢潤・棚橋健治)との対談、そして三つ目はコロナと教育に関わり多くの記事を書いている新聞記者である新本恭子氏(中国新聞)と教育学研究者(吉田成章・川口隆行)といった多様な立場からの声や考えを対談形式で深め、「学校休業」からの2年間の学校および教育を取り巻く状況を振り返り、これからの教育のあり方を展望する。

(藤原由佳*・金原 遼*・岩田昌太郎・川口隆行・桑山尚司・
滝沢 潤・棚橋健治・松宮奈賀子・吉田成章)

IV 研究の成果と今後の課題

本研究の成果として、以下の3点を挙げる事ができる。

第一に、2020年2月の「学校休業」から継続して研究活動を推進し、著作リストの更新と著作の収集および3度のアンケート調査という研究機関としての研究成果を組織・発信できた点である。著作リストは和文献に留めず、洋文献まで可能な限りでフォローし、重要な著作については本共同研究プロジェクトの一環としてEVRIの部屋（広島大学教育学部B101）に配架し、広く関心のある方に閲覧してもらえるようにできた。むろん、EVRIのHPを通じて著作リストは順次更新して公開しており、そのリストおよび著作の解釈については『教育の未来デザイン』に所収する予定である。アンケートは、2020年春・2021年春・2021年秋という定点的な調査として実施してきたことに加えて、本共同研究プロジェクトとしてEVRIの支援もいただきながら実施した3回目の調査では、広島県内の学校から数多くの声を寄せていただくことができた。2021年秋という時期と広島県の教員の声という意味を踏まえて、調査にご協力いただいた学校・教員への報告および『教育の未来デザイン』での報告を行う予定である。

第二に、オンラインセミナーをシリーズとして合計18回実施できたことである。本セミナーシリーズは、2020年4月～6月を第1フェーズ（全5回）、2020年7月～2021年3月を第2フェーズ（全9回）、2021年4月～2022年3月を第3フェーズ（全4回）として、学校休業下の教育からポスト・コロナの学校教育、そして教育の未来をデザインする教育学研究の新たな展開を描く試みであった。EVRIを基幹実施主体として、オンラインによるセミナー運営のプラットフォーム構築とともに、多様な参加者（学校教員、教育学研究者、学生・大学院生、教育関係職以外の関心のある参加者、子ども）の多様な声によって各セミナーを彩ってきた。こうした多様な参加者の多様な声を集約し、新たな教育のヴィジョンを示すための教育学研究としてのスタンスや発信のあり方を、オンラインセミナーの継続開催によって確かなものとする事ができた。

第三に、EVRIおよび2020年度・2021年度共同研究プロジェクトの取組をもとに、大学院生も巻き込んだ『コロナ』本および『リデザイン』本の編集刊行を行い、これまでの研究成果を踏まえて『教育の未来デザイン』の刊行へとつなげる研究活動のアウトリーチのあり方を提起できたことである。『コロナ』本および『リデザイン』本は、オンラインセミナーへの参加者をEVRIおよび本共同研究プロジェクトをハブとしてつなぎ、それぞれの教育への関わりと声を広く社会に問うための手段として編まれている。『教育の未来デザイン』はこの二冊のコンセプトを維持しながら、「教育」を問うスタンスの幅を広げ（子どもたちや教育関係者以外の方）、さらにEVRIの他の研究プロジェクトの取組成果とも有機的な関連づけをはかり、大学という教育・研究機関としての社会的責任と応答のあり方を提起する著作として刊行の企画を進めている。「ポスト・コロナの学校教育」あるいは「コロナ」から学校教育をリデザインするという包括的なテーマのもとでの取組が、多様な学術知の共創の場となり、その成果の集約・発信の場となったことが本研究の成果である。

本研究では、「コロナ」という全世界的に共通の課題を軸に、学校教育を学術的な知が共創する場として設定し、共同研究を進めてきた。とはいえ、「教育」、とりわけ「学校教育」に関わる知に重きが置かれてきたことの意義が明確になりつつも、その課題、すなわち「教育」以外の専門領域との知の共創とそのための場の創出という点ではさらなる可能性が残

されているという課題が、本研究を経てこれから取り組むべき組織的かつ継続的な教育学研究上の課題である。

(吉田成章*)

引用文献

- ・ 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM・教育研究開発フォーラム HP : <https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/> (2022 年 2 月 14 日最終確認)
- ・ 中原淳監修(2021)『学校が「とまった」日—ウィズ・コロナの学びを支える人々の挑戦—』東洋館出版。
- ・ 広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原和博・吉田成章編著(2020)『ポスト・コロナの学校教育—教育者の応答と未来デザイン—』溪水社。
- ・ 広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原和博・吉田成章編著(2021)『「コロナ」から学校教育をリデザインする—公教育としての学校を捉える視点—』溪水社。
- ・ 森田愛子・太田淳平・藤原由佳 (2021)「コロナ禍の学校教育への影響の調査」広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原和博・吉田成章編著『「コロナ」から学校教育をリデザインする—公教育としての学校を捉える視点—』溪水社, 21-27 頁。
- ・ 吉田成章・草原和博・木下博義・松宮奈賀子・川合紀宗・三好美織・小山正孝・影山和也・棚橋健治・川口広美・金鍾成・山元隆春・間瀬茂夫・永田良太・岩田昌太郎・井戸川豊・丸山恭司・三時眞貴子・森田愛子・桑山尚司(2021)『「ポスト・コロナの学校教育」の提起する学術知共創の可能性と課題』『広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書』第 19 巻, 1-8 頁。